

みえない ものは なに？



“気づき”に気づく練習帳
浜松市根洗学園のワークショッププログラム

著：浜松市根洗学園



もくじ

- 01… もくじ
- 02… はじめに
- 04… 3つのワークショッププログラム

- 06… **1.ゲストを招き、子どもと職員が関わるプログラム**
- 07… **アートのじかん** 擬音の絵本
- 08… **アートのじかん** どうぶつずかん
- 10… **アートのじかん** 原稿画用紙
- 12… **アートのじかん** ミュージアムショップ/療育玩具
- 14… **アートのじかん** おべんとう画用紙
- 19… 深澤孝史さん(美術家)から
～はみでる余地のあるゆるやかな形式～
- 20… **アートのじかん** だろ絵の具
- 22… **アートのじかん** これまでの「アートのじかん」ワークショップ
- 24… **音あそび** みみをすます
- 25… 松岡江利子さん(音楽家)から
～耳をひらく「音あそび」～
- 26… **音楽あそび** うたづくり
- 27… **音楽あそび** 連弾
- 28… **音楽あそび** みんなで

- 29… 片岡祐介さん(音楽家)から
～つられて、生まれること～
- 30… **からだあそび** からだあそび
- 31… 伊藤信寿さん(作業療法士)から
～音楽と作業両方の関わりについて～

- 34… **2.ゲストを招き、職員と一緒に
ワークショップを行うプログラム**
- 35… これまでのワークショッププログラム
- 37… 柏木陽さん(演劇家)から
～子どもは謎だ～
- 38… 砂連尾理さん(振付家/ダンサー)から
～呼吸と身体を往復することから始まる気づき～
- 39… 異物の力を試しながら、見つけたいものを見つける

- 40… **3.学園の日常をそのまま見せる「公開療育」**

- 42… アーティストという存在と場
川口淳一(作業療法士/結城病院リハビリテーション部作業療法科科长)
- 44… 根洗学園がやってきたこと
- 47… おわりに

はじめに

“気づき”に気づく

松本知子

浜松市根洗学園 園長

浜松市根洗学園は、社会福祉法人「ひかりの園」の事業所のひとつで、「落ち着きがない」「遊べない」などの気になる行動があったり、言葉や社会性の発達がゆっくりな児童を対象とした「療育」を行う施設です。

「療育」とは、障害がある子どもが社会的に自立することを目的として行われる医療と保育のことです。東京大学名誉教授高木憲次氏（1888～1963）により提唱され、肢体不自由児から始まった概念と言われていますが、さまざまな発達の課題がある子どもたちにとっても「療」（科学的根拠やエビデンスに基づいた知識・技術やスキル）と、「育」（子どもであつても人として尊重され慈しみを持って育てられる環境を提供すること）とのバランスを保ち、支援者・家族・地域でつくり上げていけることを目指していると考えられます。

保育園や幼稚園とは異なり、療育の施設では子ども3～4人につきひとりの先生がつきます。子どもの中に内在する「発達していく力」「学ぶ力」に期待をかけ、親と先生と子どもの三者が一体となって子どもの育ちに取り組んでいくというところに大きな特徴があります。そのため、浜松市根洗学園では、親の支えになり、理解者になり、時には教育者になり、時には友達になるという関係づくりを意識しています。

そうした関係づくりのために、私たちは2008年から美術家や音楽家など外部のゲストを迎えて、絵を描いたり、ものをつくったり、音や演奏を聴いたりするワークショップやアーティスト・イン・レジデンス、展覧会などのプログラムを実施してきました。

プログラムを通して、またゲストの方々の考え方を通して、療育に関わる私たち自身が気づいてきたことがたくさんあります。この本は、こうした私たちの気づきを、療育に関わる人、さまざまなことから抱えた方々、そしてさらに多くみなさんとも分かち合いたいと思ってつくりました。

なぜアーティストをゲストとして招いたか

療育のあり方には、療育に関わらない人にとつてもどこか通じるものがあるのではないか、それぞれの生活や日常にあることとつなげて理解できるものではないだろうか……そんなものを、探したい・つくりたい・見つけたい・共有したいという思いが始まりでした。

障害がある子どもたちの存在や療育というあり方を、なにか特別なこととして遠ざけてしまうのではなく、特別だけれども自分たちのこととつながっているものとして、どうやったら温度感を持って感じてもらえるかへの挑戦でもありました。「そんなことが果たして可能なのか？」という自分たちへのつぶやきを抱えながら、ゲストを招いて療育の現場に入ってもらう活動を始めたのです。そして、それは試行錯誤の始まりでもありました。

第1ステージ

外部者（ゲスト）は異物！職員からは、“わからない人が入ってもらっては乱される”という目線。

ゲストが学園の流れや進め方に合わせることからスタートしました。例えば、“始めましょう”と言って始めることや、進め方を子どもにわかるように伝えること。始めや終わりを明確にすること。学園の時間軸に合わせ、面白く子どもが楽しんでいたとしても“給食です。終了します”と言うことなど、ゲストが子どもたちの日常に合わせるところから出発しました。ゲストと職員との緊張感も3ヶ月ほどゆるやかにはなりました。ただ、いったんゆるやかな関係性ができてしまうと、どんなに一番初めの緊張感を求めても、もう最初の時には戻れないということも体験しました。

第2ステージ

プログラムを子どもや家族と共に、職員と共に行う中での新たなる発見

職員とゲストのコミュニケーションが取れるようになり、少しずつ関係性ができてくると、「こんなことやってみよう、やってみたい」「子どもの姿からこれもできるかも……」など、アーティストのプログラムが、いつもとは違う子どもの姿の発見窓口になりました。そのプログラムを子どもの特性や様子に合わせて微調整する役割が職員。そして職員も一緒に楽しみ発見できる活動の場になりました。

第3ステージ

外部の人に理解してもらおう試み

学園の40周年の行事として、2012年に公開療育「ねあらい劇場」を実施しました。これは学園がふだんやっている療育を公開し、学園外部の方たちに知ってもらう試みです。子どもたちにとっては日常の生活そのままの中に、さまざまなゲストと、初めて学園に足を運んだ一般の見学者の方たちも加わり、ありのままの1日を過ごしました。一般の方は見学者であると同時に、椅子を並べ一緒に療育に参加する仲間にもなる。子どもたちからすれば、周りの風景はちょっと違って、生活がいつもと同じだから違和感なく過ごす。子どもの作品がコミュニケーションのツールとなっていく。日常の中で、先生と子どもたちが起こす出来事に、参加者は「なぜ？」と疑問を持ち、「それは子育てに活用できる」など共通項を見つけ、当たり前に行っている職員の動きに「こうすれば対応できるんだ」と驚く。学園の日常には、そこに来た人・初めての参加者の中にある“なにか”を動かすものがあることを職員自身が発見していくことで、障害を公開するという、デリケートな部分として躊躇していた壁が少し開きました。

第4ステージ

連続したからこそ見えたもの

ゲストたちの「考え尽くし、し尽くす」エネルギーを継続して行く力と、参加したからこそわかる“日常とは違って見える”発見・気づき——これまでのゲストたち、そして新たなゲストによる連続ワークショップや、滞在型プロ

グラムも、これまでとは違う切り口からの実験的な関係づくりの取り組みとなりました。

連続公開ワークショップは、学園で行うワークショップに一般の人々が参加できるように告知をしたので、これまで学園を知らなかった方たちを、招き入れるきっかけとなりました。開催を知った人が知人に声をかけて広がっていき、学園という存在があることに“気づいて”もらい、“なにをしているところか”を発見してもらえたと思います。

また、学園にアーティストが滞在してもらうプログラムでは、ゲストが学園の日常の中に入るからこそ、日々の変化とその連続の中で積み重ねられていくさまざまな出来事から「次はこうしていこう」という工夫へとつながっていく体験になりました。さらに、ふだんは流れてしまう日常を切り取ることで、「この子ってこんな顔するんだ」という新たな発見や、職員が日々感じている「こんな顔を見るのが子どもの良さを感じる瞬間」を、多くの人と共有できる可能性が感じられました。

ゲストから学んだこと、参加者から学んだこと

ゲストたちからは、それぞれの経験値が蓄積された人となりを感じます。ゲストの世界観・人間観の中に身を置くことを通じて、ゲストの意図に先導されながら、自分のからだと感覚を働かせながら、自分の中に起こってくることを自分なりに意味づけていくことができます。それは発見でもあり、違和感でもありますが、そのことが1分前の自分とは変わっていき、「あっ！これなのかも」と思

える瞬間につながるのです。ゲストたちが発信するメッセージと出会うことで、自分自身の中のなにかと反応し気づきになって意識化されていく。この過程をさまざまなプログラムの中で体験することは、心地よいことでもありました。まさしくなにかが起こる。自分自身・自分と周り・自分のしていることの見え方感じ方を変える——これまでのプログラムが、変えていける素材になっていけることを大事にして、今後もさまざまな人たちと場の共有をしていきたいと思いました。

また、もともと、学園として「どのように発信していけるのか？」は大きなテーマでもありました。外部を招き入れることは、おっかなびっくりのところもありましたが、本当に少しずつ少しずつ取り入れてきたいま、見えてきたことは、療育の現場も「考え尽くし・し尽くすエネルギーを継続している場であること」への気づきと、「これを意識化して取り組んでいくことが発信の肝なのかもしれない」という仮説です。

当たり前のことだったのかもしれませんが、なにに関わる人に響くのかを考えた時、療育現場そのものの姿が周りを刺激し、関わりを持った方たちとの気づきや発見につなげていけることなのではないだろうか。療育現場での“考え尽くし、し尽くしていることはなにか”という視点を自分たち自身に向けてことから、外部のゲストの考え方、そしてその先にあるさらに違う見え方や捉え方への相乗効果が生まれるのではないか。そのことは、療育の理解、さまざまなことを抱えている人への理解と関わり方の共有化につながっていくのではないかと、いま感じています。

3つのワークショッププログラム

浜松市根洗学園で行ってきたワークショッププログラムは、大きく3つに分かれます。

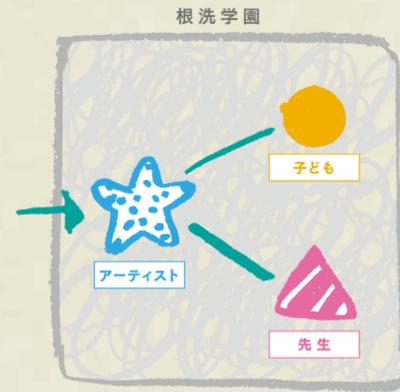
2008年に初めて行ったのは、1の外部のアーティストを学園の中に迎え入れる方法です。当時の職員から見たら、アーティストは「異物」でした。

その感覚はある時から消えていきますが、「なにが入ってきたんだろう？」という感覚を自分たちが持つことで、「外からはこういうふうに見られているんだ」という感覚に気づくことになると思います。

それをより明確なかたちで実施したのが、3の「公開療育」です。ちょうど40周年を迎えたこともあり、外の人たちを学園に招いて、自分たち自身が見つめられる契機にしたかったということもあります。

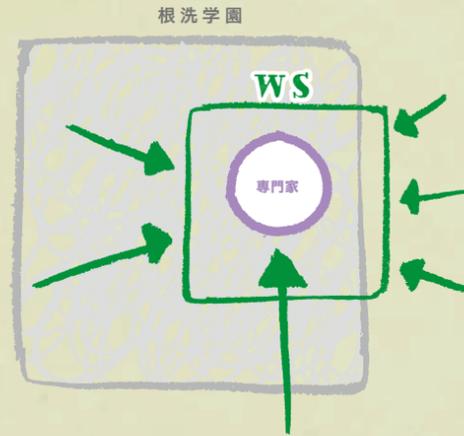
2は、外部のゲストと外部の一般の人々を学園がつなぐ公開ワークショップです。学園の日常をさまざまな人と“共につくる”ことへの第一歩を共有することで、外部の方も、職員としても新しい地平に踏み出すきっかけです。

ここでは、これまで行ったプログラムの中からピックアップしてご紹介します。



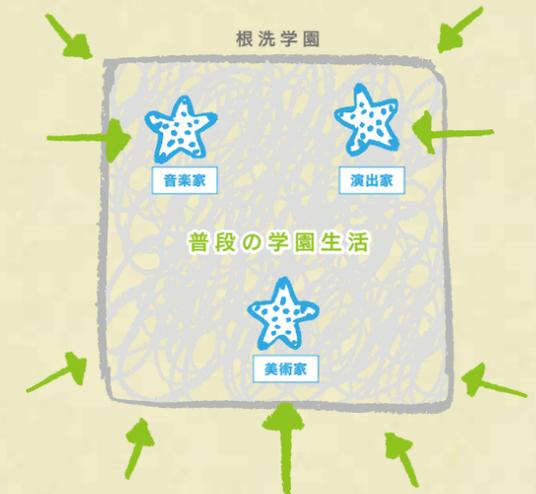
1 ゲストを招き、子どもと職員が関わるワークショッププログラム

アーティストや音楽家などのゲストが学園の子どもたちとのワークショッププログラムをつくり、職員と一緒に子どもたちと向き合う。「アートのかん」「音楽あそび」「音あそび」「からだあそび」など、子ども自身の創造性を誘発しながら、子どもと先生、子どもと親など、子どもを取り巻く人々とのコミュニケーションを視覚化する。



2 ゲストを招き、職員と一般の人と一緒にワークショップを行うプログラム

ダンス、演劇、写真、音楽という4つの分野のクリエイターと、高齢者施設の施設長と病院の作業療法士という専門家を招いた連続公開ワークショッププログラム。一般公開し、外部の人たちと学園職員が交わる機会をつくる。



3 学園の日常をそのまま見せる「公開療育」

創立40周年を機に、学園で行っている日常のワークショップや、ワークショップの結果としてつくられた子どもたちの作品などの展示や参加者による座談会を開催し、学園と社会をフラットに結びつける機会をつくる。

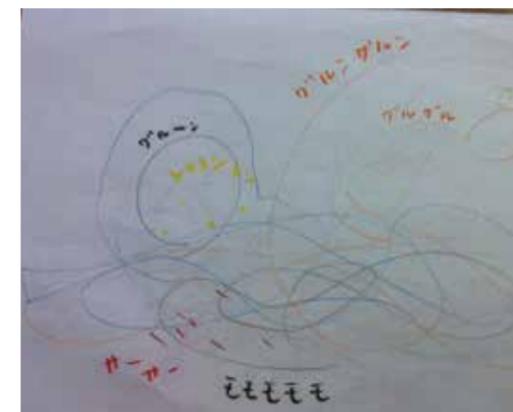
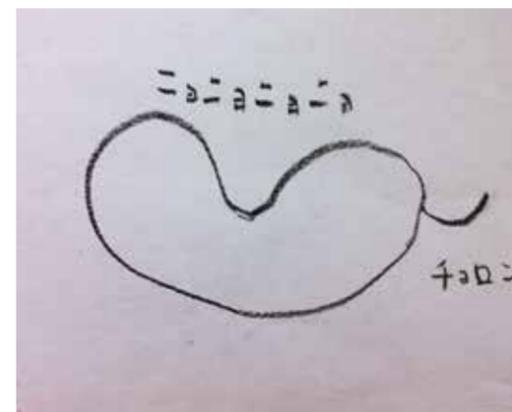
これまで行ったワークショッププログラム《年度》

	2008年/H20	2009年/H21	2010年/H22	2011年/H23	2012年/H24	2013年/H25	2014年/H26	2015年/H27	2016年/H28	2017年/H29
アート	アートのじかん (月いち)	アートのじかん (月いち)	アートのじかん (月いち)	アートのじかん (月いち)	アートのじかん (月いち)	アートのじかん (月いち)	浜松市根洗学園 100(40)周年記念品展	根洗 療育玩具工房	Artist in Residence (深澤孝史)	
音楽	音楽あそび	音楽あそび	音楽あそび	音楽あそび	音楽あそび	からだあそび	からだあそび	からだあそび	からだあそび Artist in Residence (片岡祐介)	親子ワークショップ
音			音あそび	音あそび	音あそび			音あそび (週1～月2回)	音あそび (週1～月2回)	音あそび (週1～月2回)
その他		レッツ研修受け入れ		ダンスワークショップ (研修)		おべんとう画用紙 展覧会 (静岡文化芸術大学西ギャラリー)	40周年記念事業 「公開療育」		ワークショップシリーズ 写真企画	おべんとう画用紙展覧会 (黒板とキッチン) ワークショップシリーズ Artist in Residence (柏木陽)
助成金など						projectability I (静岡文化芸術大学、 NPO法人クリエイティブ サポートレッツ)	みんなの浜松創造 プロジェクト(浜松市) projectability II 公開療育座談会小冊子 (静岡文化芸術大学)	静岡県文化プログラム 調査事業	静岡県文化プログラム モデルプログラム	静岡県文化プログラム 採択プログラム

1

ゲストを招き、子どもと職員が関わるワークショッププログラム

アーティストをゲスト先生として迎えるワークショップとしては、2008年に「アートのじかん」を始めてから、現在では「音楽あそび」「音あそび」「からだあそび」を定期的に取り入れています。アーティストが先生となって“教える”のではなく、アーティストも職員も子どもたちの中に入って、一緒に遊びます。そして、子どもたち自身の中にある力を引き出してだけでなく、子どもと先生、子どもと親の関係を“見える化”していく、コミュニケーションプログラムとも言えます。特に2009年に深澤孝史さんが考案した「おべんとう画用紙」(p14)は、現在では年少組を中心に毎年実施する恒例プログラムとなっています。



アートのじかん

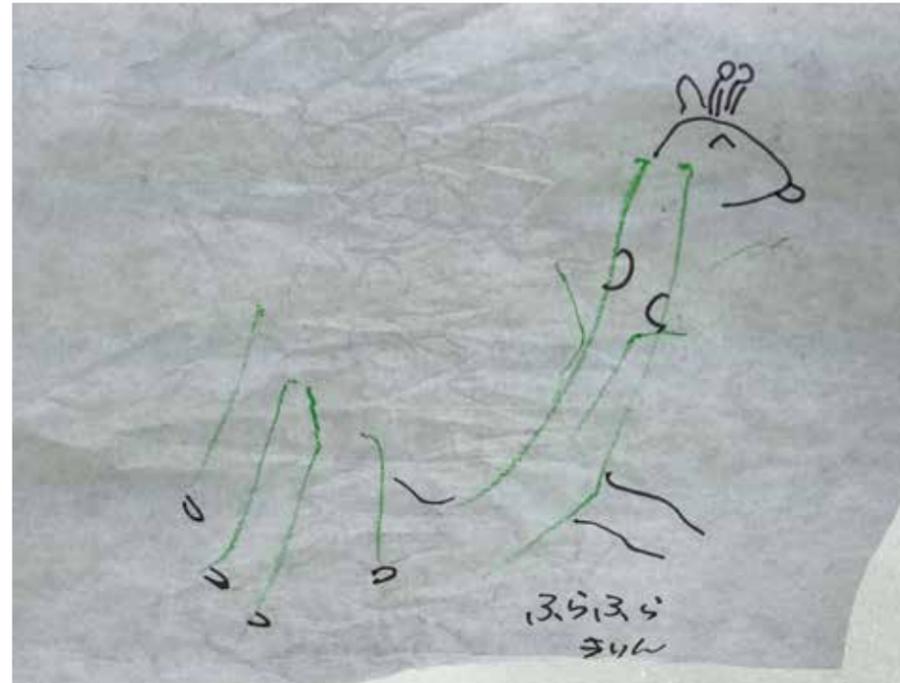
擬音の絵本

「擬音の絵本」は、子どもたちが描いた絵に、先生たちがその絵から感じる擬音、例えば「ごよごよ」とか「ブンブン」とかを書き加えていくワークショップです。アーティストの深澤孝史さんによるプログラムで、「絵を読み解くシリーズ」のひとつです。深澤さんは、絵を鑑賞することは読み解くことであり、読み解きにはいろいろな視点があると言います。子どもの教育に携わる先生たちが子どもの絵を見て「すごいね」という時、先生方は子どもの発達段階を見ているので、描かれる過程や細部に成長を感じたりしています。例えば鉛筆を持てたとか、顔になってきたとかいうところを先生方もそれ自体を別のかたちで表現するのがこのシリーズの特徴です。

またそれとは関係なく、先生方が子どもの絵を基本にしつつも自分も対等に表現する時間があるといいな、という深澤さんの視点も入っています。そうして出来上がった絵を綴じて、何冊もの「擬音の絵本」にしてみんなでめくって楽しめます。

どうぶつずかん

これも「擬音の絵本」と同様の「絵を読み解くシリーズ」ですが、ここではより先生が主役となって、子どもの絵を読み解いて、好き勝手に加えて動物のかたちにして遊んじゃおう、というプログラムです。子どもたちには最初に「今日はどうぶつずかんをつくります」と言って絵を描いてもらいますが、子どもたちは好き勝手に描きます。その絵を先生方が「これはこういうどうぶつかな？」と線や絵を描き加えて、動物らしきものにしていきます。「ぶらぶらきりん」とか「ふりむきバツタ」とか新しい動物も生まれます。子どもの絵から発想された先生たちの発想も一緒になった、あたらしい動物図鑑が生まれました。これも出来上がった絵を綴じて、何冊かまとめて本のかたちにしました。



アートのじかん

ミュージアムショップ

「ミュージアムショップ」は、「ミュージアムグッズをつくらう」と子どもたちに呼びかけています。たくさんの日用品を用意し、なるべくその素材を加工せず、組み合わせるだけで新しい使い方をみつけて、そのまま商品化するものです。ここでは、子どもの遊びを抽出するスタイルで、子どもが素材と戯れるのを観察し、面白い遊びや好きな遊びをしていたら、先生がそれを「ミュージアムグッズにするなら」と商品化を考えてシートにメモをしていきます。



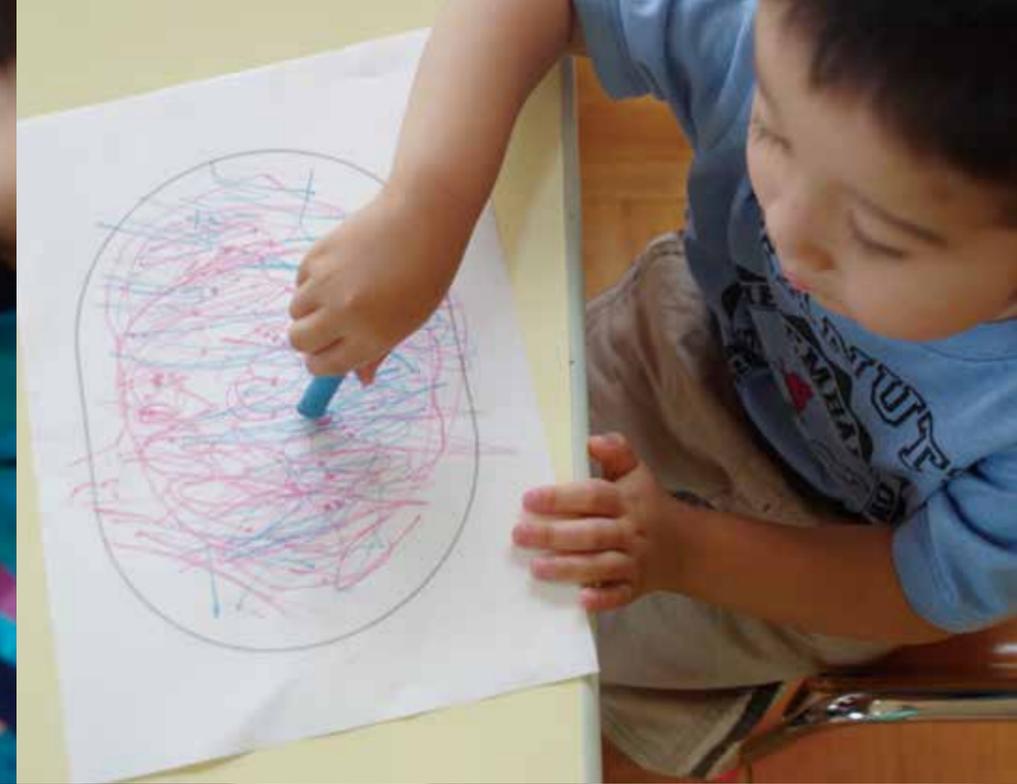
療育玩具

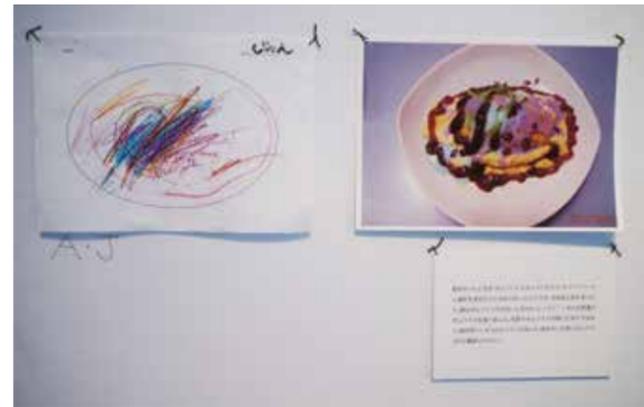
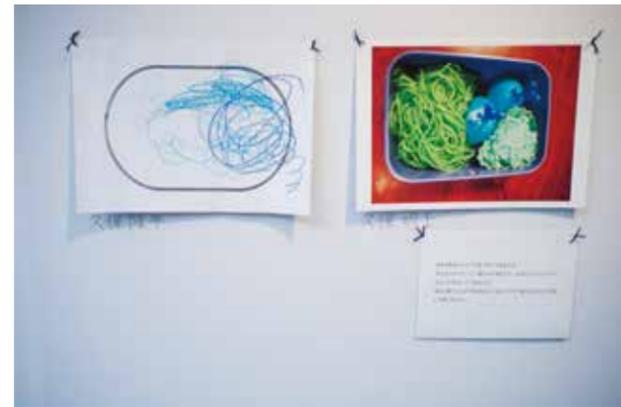
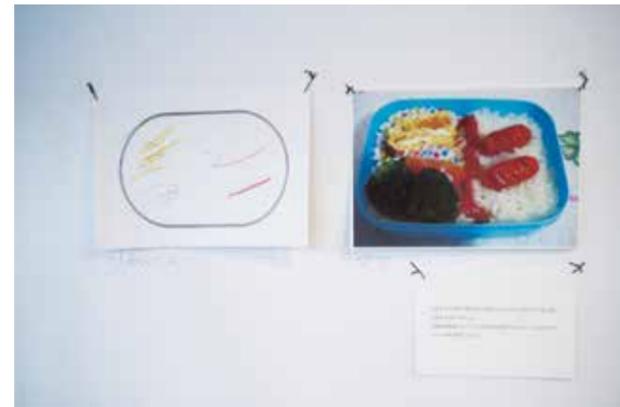
「ミュージアムショップ」からの派生で、「療育玩具」をつくり、公開療育の際に展示しました。子どもたちと「ほしいおもちゃの絵を描こう」というワークショップを行い、その絵を先生たちが見て、その絵のかたちを尊重しつつ、描いた子どもの伸ばしたい部分を療育する玩具づくりです。先生が子どもの絵と、子どもの伸ばしたい部分や特徴を文章などを深澤さんに送り、深澤さんがさらに考えて実際の玩具にして展示しました。子どもたちにも大好評で、展示物でずっと遊んでいる子もたくさんいました。



おべんとう画用紙

深澤さんが「絵を読み解くシリーズ」の最初に考えたワークショッププログラムです。職員の先生が、子どもの絵に輪を描き加えておべんとう遊びをしていたことを真似て、プログラム化しようと発想したのだそうです。お弁当箱のような輪が描いてある画用紙を子どもたちに渡して、子どもたちは落書きのような絵を描く。その絵をお母さんがお弁当に見立て、解釈し、お弁当として表現します。それを写真に撮影してもらい、子どもと一緒においしくいただけます。いまでは毎年恒例のプログラムになっていて、入園した子と親には必ず行っています。子どもの絵とお母さんがつくったお弁当の写真を並べて、お母さんがどんなふうに読み取ったかというコメントを添えてもらい、園内に展示しています。時々、園外で展示会をしたりもします。コミュニケーションの発達がゆっくりな子どもたちの気持ちをお母さんたちが汲み取って、一生懸命つくるお弁当には、いつも頭が下がります。







深澤孝史さんから

はみでる余地のあるゆるやかな形式

浜松市のNPO法人クリエイティブサポートレッツのスタッフとして関わっていた2008年に、根洗学園から造形アートプログラムの依頼があり、僕と鈴木一郎太さんが派遣されたのがきっかけで、だいたい月一回通い始めたのが始まりでした。

根洗学園の松本園長先生からの依頼内容としては、子どもたちに向けてのプログラムというだけではなく、本当の対象者は学園の先生に向けたものとして活動を始めてほしいというものだったと思います。というわけでテーマが自ずと、コミュニケーションや場について考えるものになっていきました。

初めの頃のリサーチで運動会の練習を見学しました。子どもたちが大玉転がしの練習をしているのですが、運動会がなんなのかもわからない、ましてや練習がなんなのかもわからなかったりするので、大玉転がしをするにしても子どもがやるというよりは、先生が大玉と一緒に子どもも転がしている状況がありました。その光景をなんだか面白いなあ、不思議な光景だなあと眺めていました。そう思ったのは、すでに練習という次元を超えていて、ここでの主体はなんなのかわからなくなって、運動会という形式だけ残っていたからだと思います。もちろん繰り返していくうちに子どもたちもなんとなく運動会というものを体験としてわかっていって、なんとなく見る人も含めて場を成立させていくようになっていく部分に療育、教育的な要素があるとは思いますが。運動会とかお遊戯会の演劇とか形式の中に子どもたちを当てはめても学園の子どもたちははみ出てしまう。が、ちょっとひねくれた見方すると、あえて形式の中に当てはめることで、逆に個性がにじみ出てそこが面白いということがあるなあと思いました。もちろん学園はそんなことを意識しているわけではないと思いますが、個々の特性がはみ出る余地のある緩やかな形式は面白い。

一方、先生たちは子どもたちと一対一で対応する時は割とのびのびした関わりも多く、外遊びの時も全力だったり、朝の会でギターを弾いたり、ティッシュ一枚を両手に持って顔の前でフッと息を吹きかける不思議な遊びをしたりといろいろ工夫したり楽しんだりもしていました。おべんとう画用紙を考案した時も、とある先生が子どもの描いた絵に丸く囲うように線を描いて、お弁当遊びをしていたことがきっかけでした。

いろいろな子どもたちがいるので、完全にプログラムに当てはめてやっていくというのは難しい。けど個々のありようを見ているのはとても面白い。そんなありようを許容するような緩やかな形式があるといいのかなあと考えながら、いろいろプログラムを実験していったように思います。



深澤 孝史

ふかさわ・たかふみ

美術家。1984年山梨県生まれ。場や歴史、そこに関わる人の特性に着目し、他者と共にある方法を模索するプロジェクトを全国各地で展開。主な活動として、漂着神の伝説が数多く残る町で、漂着廃棄物を現代の漂着神として祀る神社を建立した《神話の続き》(奥能登国際芸術祭/2017)、埋もれた地域の歴史を現代に結びつけ直すことで、市民の主権と文化の獲得を目指す《常陸佐竹市》(茨城県北芸術祭/2016)、里山に民泊し、土地特有の近代化の資料を集めていく《越後妻有民俗泊物館》(第6回大地の芸術祭/2015)、お金のかわりに自身のとくいなことを運用する《とくい銀行》(取手アートプロジェクトほか/2011〜)など。

アートのじかん

どろ絵の具

深澤さんが先生に、最近困ったことはあるかと尋ねたところ、新しいクレヨンがなかなか買ってもらえないとの返答を受けました。ないならあるもので絵を描こうと考え、学園の土を絵の具にして敷地のどこにでも好きな絵を描いてみようとしたワークショップです。壁や柵、入り口などいろいろなところに手に泥をつけて描きます。子どもたちは体全体を使って、あちこちに絵を描き、歓声をあげて喜びます。もちろん先生も一緒に描いていきます。泥ですから、雨が降れば流れてなくなりますから、描かせる側も安心です。



これまでの「アートのじかん」ワークショップ

深澤孝史さんには、2008年から2013年までほぼ毎月「アートのじかん」に来ていただきました（2014年以降はプロジェクト型に移行）。先に挙げたワークショップ以外にも、いろいろなプログラムを考案しては実験的に繰り返してきました。これまで行ってきた「アートのじかん」のプログラムをご紹介します。



ダンボールで場所をつくる

ダンボールを使って、描いたり切ったり貼ったりして、遊び場をつくらうというプログラムです。子どもたちが遊び道具と遊び場を結びつけられるのが理想のイメージで、電車をついたら線路や駅をつくっていきます。つながりながらつくっていくプロセスを大事にしています。



白い紙を着る

絵を描くのではなく、白い紙を使って、洋服にしたり、体に巻きつけてみたりしました。



展示する

子どもたちは絵を描いたらどこでも貼りがります。展示すると子どもたちは喜びます。どんどん展示をしていったら、場も変わっていきます。なので、これは「展示をする」ということをテーマにしています。



ひもに展示

「展示する」のバリエーション。描いた絵をひもにぶらさげていきます。



大きな紙に描く

大きな絵を描いてみようというプログラムです。子どもたちは他人の絵に興味がなく、どんどん消していったりするので、それをプログラムにしようと思いました。みんなで描くけど、これは自分の絵だというつもりで描いて、全員にタイトルをつけさせました。

バスラッピング

子どもたちの絵を外に発信するには、通学バスを移動壁画美術館にしてみたらどうか、という発想です。もちろん、紙を貼っていますから、このままバスが走ったら飛ばされてしまいます。なので園内だけでしたが、バスに自分たちの絵を貼っていました。



これまでの「アートのじかん」ワークショップ

- ロール紙を広げて好きに絵を描く
- おべんとう画用紙
- 大きい絵を絵の具で描く
- 原稿画用紙
- 人間図鑑をつくらう!
- どうぶつずかん
- 学園バスをみんなの絵でラッピングしよう
- 根洗歴史絵本館
- 絵本をつくらう
- 大きい絵をひとりで描く
- 素材をくっつけてグッズをつくる
- 絵を描いて展示する
- 絵のカーテン
- 穴あき絵本づくり
- 療育玩具工房
- ねあらいぬりえ
- さし絵本
- ミュージアムショップ
- 〈美術館に置いてあるようなおしゃれグッズをつくらう〉
- 描いたら展示しよう
- 擬音の絵本
- ねあらいずかん
- のりものずかん
- 記録おり紙
- しりとり絵本
- シュレッターあそび
- 黒板
- ピクニック絵本（散歩して公園で絵本をつくる）
- A4のコピー用紙だけで衣装をつくる
- どろ絵の具で園舎に要望を書く
- 紙すき
- たまになろう（ゴミ袋に入れて校庭をゴロゴロ転がる）
- ダンボールで空間づくり
- 穴あき絵本
- 自由に絵を描く、描いたものをつなげる
- たまになつてたまを転がす
- どろ絵の具で壁に絵を描こう



みみをすます

松岡江利子さんによる音を聴くことに特化した取り組み。発泡トレイや厚手の紙箱に張った輪ゴムを耳元ではじいて出る音、ピンポン玉をはずませて出る音、新聞紙を割いて出る音など、繊細な音に耳を傾けてみます。はずむピンポン玉につられて大いに盛り上がることもありながらも、その中でさらに集中力を高めて自分の持っているピンポン玉の音を聴こうとする子がいたり、時折意外な姿の発見もあります。



松岡 江利子
まつおか・えりこ

国立音楽大学教育音楽学科卒。浜松市内小中学校音楽科教諭として12年間勤務。浜松こども館準備委員を経て、開館から6年間事業係職員として勤務。その後根洗学園での「音あそび」をはじめ、市内各所で親子サロン、音あそび、歌声広場、コーラス指導、高齢者の音楽レクリエーション、認知症予防教室、介護家族教室など、療法的音楽活動の講師として活動。女声音楽アンサンブル「アンサンブル・キール」、「浜松合唱団」所属、浜松音楽療法研究会、日本音楽医療研究会会員。



松岡江利子さんから

耳をひらく「音あそび」

にぎやかなだけが音楽ではなく、音楽の始まりと終わりには、必ず静寂の状態がある。私の音あそびはここに焦点をあてています。音・音楽は人の心に高揚感を与え、活力を生み出してくれます。小さい音・短くても印象的な音は、走る心にブレーキをかけ、一瞬立ち止まらせます。ふと冷静になり自分の内面に思いをはせるような、気持ちが落ち着き安らくような、そんなひととき・そんな効果をもたらす音を私は追求しています。そんな音を耳に入れることで、耳がひらかれるのではないかと感じているのです。

● 音あそびの音

小さな音・瞬間的な音

- ・静かで落ち着いたイメージ
- ・気分が内向きに
- ・音の種類は少なく
- ・一音を味わい、沈静化する
- ・音に集中する

大きな音・持続的な音

- ・明るく活発なイメージ
- ・気分が外向きになる効果
- ・多種多様な楽器が使われる
- ・音が継続、重なることで高揚する
- ・音の中で身を委ねることで心を解放させる



● 目指す音あそびの音

- ・美しい音
- ・心地よい音
- ・心動かされる音
- ・小さな音
- ・瞬間的な音

● 子どもの様子・表れ

音をじっくり聴く時間、音を鳴らしながら自由に遊ぶ時間、またじっくり聴く時間と、緩急をつけたプログラムを実施することで、耳をすまして聴く場面をつくっています。

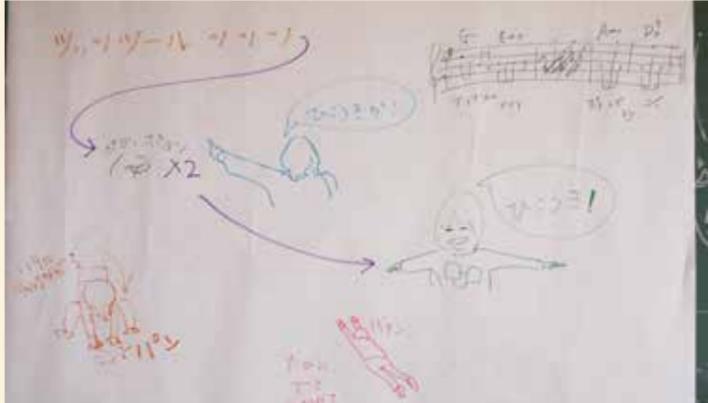
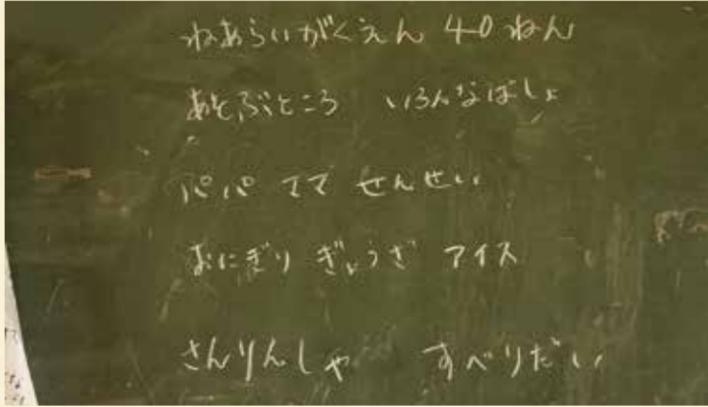
先生方からも、集中して聴いている、話を落ち着いて聞けるようになったなどのご意見をいただきます。小さな音に寄り添うことで心が落ち着き、行動にも反映するのです。「耳をひらく音あそび」は、そうっと楽器を鳴らす・軽くポンポンと友達の肩をたたくというような、加減をするのが困難なことにも影響が及ぶのではと期待されます。

うたづくり



音楽家の片岡祐介さんを2008年頃から年に数回ずつお呼びして行ってきた「音楽あそび」の中でやったワークショップのうちのひとつ。「うたをつくりましょうか」と投げかけた後に子どもや先生たちから出てくる言葉やそのリズムなどを拾ってつなぎ合わせてうたをつくります。拾うのは言葉に限らず、時には手や床を叩いて出る音、擬音のような声から、ジャンプしたり、からだをよじったポーズ、顔の表情などにも敏感に反応してうたの中に取り込んでいました。

連弾



子どもひとりがピアノに呼ばれ、その子のピアノ演奏（人によっては鍵盤を弾かずにピアノのふたを動かすだけのこともあります）に片岡さんが反応して即興で連弾をしかけるプログラム。ひとりだけの時間だと思っていた子が隣に入ってくる片岡さんの存在に反応して、拒絶したり、少しずつお互いの音に聞き耳を立てながら鍵盤を弾いたり、ひたすらひとりの世界で鍵盤を叩いたり、その子ならではの反応が引き出される時間。弾いていない間はじっと聞く時間として椅子に座っています。

みんなで

とにかくみんなが同時に楽器を演奏します。子どもたちそれぞれが自発的な表現をする中、片岡さんはその中で時には伴奏したり、時には自分も好きなように弾いたり、場の雰囲気を感じながら演奏していました。子どもたち全員に一齐に楽器を渡すこともあれば、数を限定して少しずつ渡したり、途中で間引いたりしながら全体のアンサンブルをつくりました。毎回、最初はバラバラでハチャメチャな状況ですが、だんだん自然なコミュニケーションが発生して、一体感とノリが出てきました。



片岡 祐介

かたおか・ゆうすけ

音楽家。1969年生まれ。少年時代に即興音楽に目覚め、木琴のデタラメ弾きを始める。音大の打楽器科で主にマリンバを学ぶが、中退しプロの演奏現場に入る。歌手のバックバンドやCMの音楽など商業音楽の世界でしばらく活動するが、少年時代の初期衝動が忘れられず、物格化された「コンテンツ」ではない、生きた音楽を実践する場として、学校や障害者施設などでのワークショップ活動を開始し、非専門家のどんな表現も受けとめて音楽にしようとする特殊技能を身につけた。2006年NHK教育テレビ「あいのて」にレギュラー出演。CDに「カネタタキ」、著書に「即興演奏ってどうやるの」(野村誠と共著/2004)などがある。

片岡祐介さんから

つられて、生まれること

身体と音楽の関わりについては、打楽器の演奏を出発点にしている僕にとって大きなテーマのひとつでした。地面を蹴ることで生まれるビート、身体を揺る感覚。右半身と左半身の関係とその統合、重力を信用すること、遠心力を味わうこと、メロディーとその持続感、皮膚感覚で響きを感じる、意志と呼吸について、などなど。そういったことを、自分なりに演奏家として武者修行的に探求してきました。なので、根洗学園で「からだあそび+音楽」の試みを始めたことは当然の流れだったかもしれません。とりわけ「他者の」「集団の」「空間としての」身体についての気づきが大きくありました。

現場では、子どもたちが遊具(作業療法的に設定されている)で遊ぶ中、僕がみんなの動きの渦を感じながらリズムを発したり、あるいは特定のひとりの動きの背中を押すような音を具体的に奏したり、いろいろな関係性で音を出しました。

初回の印象が強烈でした。保育士さんの数名から、子どもたちを応援するような手拍子が自然に沸き起こり、それはおそらく無自覚でやっているように見えました。音楽活動の時にはなかったタイプの手拍子(のニュアンス)でした。子どもたちの動きも、僕のリズムに「つられて」影響を受けているようにも見えたし、だけでも付かず離れずな関係で、いわゆる「アクティビティ」とは違う自然な空間が生まれる予感に満ちていました。

一見リズムカルな感じがするトランポリンと音楽の共演が、わりと単調だったりします。それよりも、ロープを握って坂をジリジリよじ登る動きと鍵盤ハーモニカの持続音に、音楽的なテンションの妙があったりします。最初のうち僕は、わりと直接的に動きと音楽をリンクさせようとしていました。

その後、回数を重ねる中で、ひとりの動きにガッツリと共演するのは、よほどその子の動きに興味を持った時だけにして、全体を広めに取ったほうが、人と人之间に流れる風を感じるようになってより豊かかも、と気づきました。

あえて生演奏を封印して、部屋に設置されているスピーカーを使って、DJ的に既成の音楽(ダンスミュージックやアフリカドラムのCDなど)を鳴らしてみたいこともあります。子どもたちに極端にウケがいい(動きを誘発する)タイプの楽曲が絞こまれたりもして面白さもあったんですが、いまひとつ僕の居場所がないし、人体実験的な感じがちょっと嫌になり、楽器演奏に戻しました。

からだあそびとの共演で、僕は特定の楽曲を演奏することは減多になく、常に即興演奏です。空間全体の雰囲気の重さや密度、もつとえば匂いや色を、動き続ける状況に応じながらリアルタイムに変化させ続けることができるのが即興音楽なわけで、身体の延長、つまり「みんなの身体」としての空間(部屋)に僕はアプローチをしていたんだと思います。

今後どこへ向かうのでしょうか。山へ行きたいかも。山を登る時の身体の多種多様な重心移動。そんな音楽は可能でしょうか?あるいは根洗学園のプレイルームを山(やジャングル)にすること可能かどうか。

からだあそび

からだあそび

もともと作業療法士の資格を持つ先生が中心となっ
て行われていたプログラム。ありもので手づくりされた
遊具での遊びを通じて、運動機能、周囲との関係性、
心の動きなどに観察の目を向け、課題の発見や日常
生活の中で見つけている課題克服に向けた挑戦など
を複合的かつ即興的に行う時間。これまで行って
きた「音楽」という枠組みの中で音楽家がなにかをす
るということから離れて、学園で起こっていることに音
楽家が入っていくということに挑戦してみよう、とい
う話し合いから始まりました。DJのように場に合わせた
いろいろな音楽を選曲してかえてみたり、遊んでいる
様子に反応しながら打楽器やピアノを演奏してみたり、
ドラムセットを持ち込んでみたり、ずっと鳴らしていた
音を突然なくしてみたり、一緒になってからだを動か
してみたり、音楽家の行動や視点を入れ込むことでな
が立ち現れるか試行錯誤を繰り返しました。



伊藤 信寿

いとう・のぶひさ

1989年福井医療技術専門学校を卒業し作業療法士を取得。肢体不自由施設に赴任し、その後県立広島大学を経て、現在の聖隷クリストファー大学に勤務。兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科を単位取得退学し、2016年博士号取得(学校教育学)。2017年特別支援教育の専門作業療法士に認定。広島では、広島県と福山市、尾道市、三原市の教育委員会特別支援教育の巡回相談員を務める。2015年5月にNPO法人むくを設立し、同年8月より多機能型事業所むく(児童発達支援事業と放課後等デイサービス)を開設。

伊藤信寿さんから

音楽と作業療法の関わりについて

発達障がいの子どもたちに対する作業療法のひとつとして、アメリカの作業療法士Ayresが提唱した感覚統合療法というのがあります。スイスの心理学者のPiagetは、「子どもは環境との相互作用の中で発達していく」と述べています。我々は、視覚や聴覚、嗅覚といった感覚を通して、環境からの情報を脳内に取り込んでいます。そして、環境からの情報を上手く取り込むことが、正確な判断をして、運動をする、勉強をする、集中する、服を着る、お箸を上手に使うなどの適切な行動を可能としています。しかし、自分自身の身体や環境からの情報(感覚刺激)を上手く整理して取り入れることが苦手なために、不適切な行動を起こしている子どもが少なくありません。このような子どもたちに対して、遊具やさまざまな感覚が得られる玩具等を使用して、感覚情報を上手く整理して適応行動を引き起こすことを目的とした療法が感覚統合療法です。しかし、感覚統合療法は、子どもの発達を促す手段のひとつですが、訓練ではなく子どもが楽しいと思えることが大事です。そこで内的欲求が生まれ、自発性が高まることが大事です。

今回は、感覚統合療法を基盤とした運動遊びと音楽とのコラボレーションでした。音楽は世界共通の言語とか、音楽に国境という壁がないと言いますが、今回においても、音楽に年齢や障害の有無は関係ないと感じました。また、感覚統合では、遊びや運動をするための環境設定はしますが、「これをしよう」と支援者は言葉で促さないことが多いです。子どもが遊具等を見て、子ども自身がどうやって遊ぼうかなどを考え、チャレンジし、失敗したら、またチャレンジすることを支援します。しかし、遊び方のイメージが浮かばない子どももいます。今回の運動遊びの中で音楽や音を手掛かりとして、遊び出す子どもがいました。さらには、音楽や音を手掛かりに、バランスをとったり、リズムよく動いたり、動きがスムーズになる子どももいました。まさしくこれは聴覚(音楽や音)と固有覚や前庭覚(自分の体の状態がわかる感覚)、あるいは運動の計画との統合であると考えられます。例えば、「手をここに置いて」とか、「足を挙げて」と言葉で促してもわからないが、音楽や音の種類や強弱で、理解できたり、音楽や音のスピードの強弱でリズムやスムーズな動きができたりと、音楽や音が運動の手掛かりになっていると思われる場面が多々見られました。身体障害領域においては、外界よりリズムが感覚入力されることで、外発的随意運動系が動き、随意運動がスムーズに行われると言われ、音楽を使用しているリハビリテーションも多く見られます。そのため、今回においても、音楽や音が子どものバランスやスムーズな運動を促したと考えられます。このように発達障がい領域においても、音楽やリズムの感覚入力を与えることで、スムーズな運動を促すことが期待できると言えます。



2

ゲストを招き、職員と一般の人が一緒にワークショップを行うプログラム

福祉の業界には多くの専門知があり、多くの研修プログラムがあります。一方で人と人の関係が密になる福祉現場において、他分野が培ってきた知識や技にさらなるヒントが見つかることもあります。私たちはアーティストや外部の専門家との取り組みを長年重ねてきた中から、そんな他分野との出会いの豊かさを知りました。

そうした体験の一部を提供しようと企画したのが、「ねあらいがくえんのワークショップシリーズ」です。2016年度に「何に気づき、どのように意味づけるのか、思い込みからの解放」、2017年度に「やったことないをやってみる 2017」と題して開催しました。

この一連のワークショップは、子どもたち向けではなく、どうしても学園の中で日々の仕事だけになりがちな学園の職員と、日頃療育とは関わりのない人たちが交わる機会づくりです。創造的な領域で活動する専門家の方々と一般の方々と職員が共に学ぶ機会はなかなかありません。それぞれの立場からの新しい視点を獲得できると同時に、「施設を開いていくこと」と「施設に気づく」の双方の接点となる場づくりでもあります。

これまでのワークショッププログラム 2016年度・2017年度



写真：2016年度

ゲスト すずや 《すずやカメラ店主》

「いつもの写真にひと味加えるために」2016年度

幼稚園や福祉の現場では業務の中で写真を撮ることがあるかと思いますが。この回では、カメラや写真を撮る際の基本的な技術を実際に撮影しながら、「カメラとデータの基本的な扱い」「被写体との距離、アングル、背景との関係など構図に関すること」「シャッターチャンスを見逃さないためのtips」などを教えてもらいました。ただシャッターを押すのではなく、ある瞬間の見方や捕まえ方を教わったように思います。



写真左：2016年度 写真右：2017年度

ゲスト 砂連尾理 《振付家、ダンサー》

「異なるレイヤーへのダイブ!」2016年度/2017年度

見たり、触れたり、聞いたりという普段なにげなくしている行動を見つめ直してみるワークを行います。角度を変えてみたり、しつこく触ったり、じっくり聞いてみることを通じて、そこにある物や関係や時間の違った側面に飛び込んでみます。身体を通して、日頃当たり前のように触れている物事をとらえ直してみる思考を育むワークショップです。



写真：2016年度

ゲスト 淡路由紀子 《特別養護老人ホームグレースヴィルまいづる施設長》

「高齢者施設の中の哲学・ダンス・文化人類学」2016年度

2010年に上演されたダンス公演をきっかけに、高齢者施設にダンサー、哲学者、文化人類学者を招く淡路さんのワークショップや勉強会は合計100回を越え、現在も続いています。その内容や経緯やねらい、施設の成り立ちや業務の紹介などをお話いただきました。高齢者福祉と療育と分野は違いますが、外部の人との取り組みへの期待や、利用者へのアプローチ、職員に対するアプローチなど重なる部分を探り、実際の取り組みにつなげるヒントを得られる機会でした。



写真左：2016年度 写真右：2017年度

ゲスト 片岡祐介 《音楽家》

「音のコミュニケーション」2016年度/2017年度

からだや物を使って音を出して遊びます。音を聞く/発するワークを通じてコミュニケーションとしての音について、感じて考える機会となります。楽器などの音楽経験はいっさい不要です。身の回りのもので楽器をつくるアイデアは、保育園や家庭でもすぐチャレンジしてくれました。2017年は学園に通う子どもたちとお母さんを対象としたワークショップも行いました。



写真上：2016年度 写真下：2017年度

ゲスト 柏木陽 《演劇百貨店代表／演劇家》

「シアターゲーム」2016年度／2017年度

俳優のトレーニングに使われる「シアターゲーム」と呼ばれる演劇スキルをゲーム感覚で養うワークを行います。注意力や観察やコミュニケーションなど日常生活や業務の中で使っている要素に、ゲームを通じて改めて意識を向けてみることで生まれる変化を楽しみながら体感します。近隣の施設から障害者の人たちも参加してくれ、その場で生じる関係性が面白くなりました。



写真上：2016年度 写真下：2017年度

ゲスト 川口淳一 《作業療法士、結城病院リハビリテーション部作業療法科科長》

「役割や居場所について」2016年度

自閉症やLD（学習障害）の子どもたちと演劇をつくったり、地域の人たちで組織された演劇公演の裏方を認知症や寝たきりのお年寄りが担ったり、作業療法士として周囲の環境に対応しながら行ってこられたお話から、役割や居場所の大切さを考えました。

「生活支援と集団のちから」2017年度

誰かの役に立つ、遊ぶ、つながる。人の生活にとってこれらは決して失ってはいけないものです。しかしこれらはどれも「ひとり」では得ることのできない体験です。人が生活感を帯びた暮らしを取り戻す上で、人の存在はなくてはならないものです。なので「集団」をひとつの道具として用いることで、その人の暮らしがワクワクする場面を引き寄せることがあります。この回は集団を用いる時の作戦の立て方から、そのアウトカムを知る方法まで事例を通してお話いただきました。また、学園に通う子どもたちのお父さんたちだけのワークショップも行いました。

柏木 陽さんから

子どもは謎だ

子どもは謎だ。時として周りが思いもつかないような突拍子もないことをやってみせる。なぜ？どうして？と聞いてみても不思議そうな顔をしてなぜそんなことを聞くのかとこちらを見返してみせたりする。しかしその謎は子どもの成長とともにゆっくりとなくなっていくように思われる。そしていつか大人たちと同じことを考え同じように思い同じように行動するのだらうと大人たちは期待する。その期待が誤解を生むのだと思う。

根洗学園はすごくまっとうな場所だ。子どもという謎が謎のまま保存されている。根洗学園の子どもたちと相対すると私は常に考える。なぜこの子は私の方を向かないのか、なぜこの子はこんな小石ばかり集めてくるのか、なぜこの子はずっと飛び跳ね続けているのか。彼らにそんな質問を投げかけても、なぜそんなことを聞くのかというばかりの顔でこちらをのぞき込むか、そんな言葉を気にもしないで次の興味へと向かって行くだらう。そんな疑問は私のほうで考えれば良い。だって知りたくてわかりたいのは私のほうなのだから。謎がなければ人は考えることもしないうらう。自分と同じように自分が思うように同じことを考え同じように行動すると思ひ込む。そんな誤解の数々が、大きかったり小さかったりするさまざまな悲劇を起しているのだと思う。

芸術は、これはなにを書いているのか、これはなにをしているのか、これはなぜこんなものなのかということを考えなくてはいけない行為だと言う。だからだらうか、芸術と子どもは相性が良いなどと言われる。常に目の前に提示される謎を考え続けなければいけないということだらう。

そんなわけのわからないものと一緒たにされている子どもたちはいい迷惑だらうと思うが、そういう意味で言えば根洗学園の子どもたちは謎だらうけども芸術的かもしれない。いや本当は誰か他の人と言うのは謎なのだ。謎であり続けるのだ。

だが子どもはやがて成長する。背が伸びて体重が増えてくると少しずつ出来ることが増える。やがて自分から動き出し言葉を喋り、意思の疎通を図る。するとほとんどの人は誤解するのだ。いま自分はこの同じ言葉を喋っている人と同じことを考えているに違いないなんて。みんな忘れて同じことを考えているなんてことがないことを。その点根洗学園の子どもたちはそのことを思い出させてくれる。いや、子どもという存在はいつでもどんな子どもでもそんな存在なのだらう。根洗学園の子どもたちは特にそんなことを考えさせてくれる。

人は悲しいから泣くのか泣いたから悲しいと思うのか。彼らの行動を見ていると途方に暮れていくことがある。彼らは全身で名づけ得ない自分たちを表現する。時々それらの状態に遊びでアフレコを試みたりする。部屋の隅つ

こで子どもたちのしぐさや表情に合わせてブツブツ言っているとちょっとだけ彼らの謎が見えたように思う。演劇をやるみたいに実際に声に出し彼らのとった行動をやってみると彼らの感じていた何分の一かでも想像することが出来るかもしれない。その想像を証明してくれる人はいない。それらの行為にお墨付きをくれる人はいない。でも、それが真つ当なやり取りにも思える。

部屋の隅つこでブツブツ言ったらみんなでそれをやってみて欲しいと言われたので今度は先生を巻き込んでやってみるつもりです。そのうち親御さんも巻き込んで彼らという謎と対峙してみたいと思っています。



柏木 陽
かしわぎ・あきら

演劇百貨店代表／演劇家。1993年以降、劇作家・演出家の如月小春とともに活動し、アジア女性演劇会議事務局、兵庫県立こどもの館の野外移動劇ワークショップなど

新たな演劇の可能性を探る現場に関わる。2003年特定非営利活動法人演劇百貨店を設立し、代表理事に就任。他セクターとの協働事業を企画、ワークショップを通じて全国各地の劇場・児童館・美術館・学校で、子どもたちと独自の演劇空間をつくり出している。主な活動に、兵庫県立こどもの館「こどもの館劇団」構成・演出（2001）、世田谷パブリックシアター契約ファシリテーター（2008）、川崎市立多摩市民館「ちっちゃい演劇フェスティバル」フェスティバルディレクター（2009）など。青山学院女子短期大学、大月短期大学、和光大学非常勤講師。平成28年度演劇教育賞（日本演劇教育連盟）受賞。



砂連尾 理さんから

呼吸と身体を往復することから始まる気づき

身体の“気づき”に気づくために呼吸を軸に見てみよう。まず楽に座って鼻呼吸をする。ダンサーであってもなくても、子どもも大人も、もちろん障がい者や老人とも、“呼吸すること”に意識を向けることから私のワークは始まる。呼吸に意識的になると身体の強ばりが感じられるようになり、普段は気にしていない身体のさまざまなところに力が入っていることに気づく。もしかすると最初は力が入っていることすら気づかないかもしれないし、その強ばりに気づいたところでそれをどうやって抜いていいのかも分からない。そんな自分と自分の身体の距離や関係が呼吸をすることで見えてくる。いままで無意識に行っていた呼吸に改めて意識を向け、呼吸をひとつの物差しに身体のいろいろなところに耳を澄ますと身体が徐々に変わっていく。

胸を開く。両手を結んで後頭部に当て息を吐きながら胸を開く。胸を開くと単純に気持ちが良い。これはひとりでも十分気持ちよいワークだが、二人一組になってもうひとりに介助してもらいながら行くとさらに気持ちが良い。気持ちが良いとなると自然に笑みがこぼれ、身体も緩んでくる。その身体の弛みは場の雰囲気も変

え、とどん呼吸が落ち着いてくる。

肩肘の力を抜く。肩肘を張るという言葉があるが、その言葉を調べてみると、気負う、いばるといった意味がある。ワークをしているとその字のまま緊張した身体によく遭遇する。みんな頑張っているのかもしれない。もちろん頑張っていること自体は悪くないのだが、その頑張りは時に息を浅くし呼吸を乱す。そんな時、首や肩を解し一息入れてリラックスする。そうして楽に呼吸すると視野が広がりその場の空間もゆったり感じられてくる。頑張るなさい、一生懸命やりなさいと言われて過ごしてきた私たちが、この頑張らず楽に呼吸する状態が結構難しく、そんな頑張らない状態になってしまうのが案外怖いかもしれない。

肚を据える。肩肘で気張っていた力を抜き、肚に力を入れて呼吸してみる。肚で呼吸のイメージが難しければ、鼻呼吸を強めにする。それを繰り返していると、自然と肚に力が宿ってくる。肚が据わると呼吸も深くなり身体全体が充実してくる。

こうやって呼吸を軸に胸、肩、肘、肚に関わるだけでさまざまな身体の変化に目を向け、自分自身の囚われや縛りに気づいていき、その気づきを解していくことで身体が変わる。そんな気づきと解しの循環を拡張していくと一体どんな自分、身体になっていくのだろうか？感じ方を

拡張した先の地平には自己と他者に健常障害、老いに若いといった概念だけでなく、空間や時間感覚の概念も解れ、すべてのものが解れて揺らぎあうそんな自由な身体の踊り場と出えるのではないかと、私は思っている。

砂連尾 理
じゃれお・おさむ



振付家、ダンサー。1991年寺田みさことダンスユニットを結成。2002年「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞」(グランプリ)、「オーディエンス賞」をW受賞。2004年京都市芸術文化特別奨励者。2008年度文化庁・在外研修員として、ドイツ・ベルリンに1年滞在。近年はソロ活動を中心に、ドイツの障がい者劇団ティクバとの「Thikwa+Junkan Project」、京都・舞鶴の高齢者との「とつとつダンス」、宮城・開上(ゆりあげ)の避難所生活者への取材が契機となった「猿とモルターレ」、音楽家・野村誠との「家から生まれたダンス」、濱口竜介監督映画「不気味なものの肌に触れる」への振付・出演等。著書に『老人ホームで生まれた〈とつとつダンス〉:ダンスのような、介護のような』(晶文社/2016)。

異物の力を試しながら、見つけたいものを見つける

何かについて考えていきたい時は、内部でなんとかしようというよりも、外部の人たちという異物の力を試しながら見つかると思います。それは職員だけでなく、一般の方々も、親にとっても同じです。

川口先生に初めて学園に子どもたちを通わせているお父さんたちを対象にしたプログラムをやっていただきました。これまでも学園ではお父さんたちの集まりも行っていましたが、経験者の話を聞いたり職員主導の交流会をすることに少し行き詰まりを感じていました。50人弱のお父さんたちと川口先生が行ったワークショップは、名刺大の紙に、ひとり一枚ずつ子育てについて考えたいこと、話したいこと、聞きたいことを書いてもらい、名刺交換してテーマを確認し、それぞれのテーマに点数をつけて、点数の高いテーマを4つ選んでグループで話し合う、というものでした。叱り方、進路、将来、チャレンジ、こだわり……最後に書いていただいた感想には、「考える場となった」「情報交換ができた」「他の人の考え方を聞けた」「濃い話を聞けた」「いろいろな意見を聞けた」「参考となる点が多かった」などがありました。話を聞くだけでなく、考えるスタイルだったので、お父さんたち自身が「話したいこと」を考えて話せる場を用意できたところが大きかったと思います。私たちもいままで「話してほしいこと」を誘導していたのかもしれないと気づきましたし、お父さんたちへの対応の仕方にも学びがありました。お父さんたちが50人弱も集

まって話をするには世の中にはなかなかありません。50人のパパの声は宝物です。

また、片岡さんに、子どもとお母さんと一緒に対象にしたワークショップもやっていただいたら、新しい親子関係が生まれている感じがしました。お母さん方がいることで、職員と子どもの関係も少し変わります。周りでは子どもを音楽教室に行かせたりする年頃ですから、親としても子どもたちにやらせてあげたい。けれど、みんなと同じところに行ってもうまくできないかもしれない。だから、お母さんたちがこれからこの子たちになにをしてあげるのが見つかる意味でも、片岡さんとお母さんも一緒に楽しんでいる中で、「こういうことをこの子は楽しむんだ」とか「こんな遊び方をするんだ」とか「聞いていないようでも聞いているんだ」という様子を見て、普段の生活の中では見つけられないものや関わり方を見つける場になったように思います。学園の職員が見つけたことを家族でも共有してほしいと願っていても、なかなか出来づらいところがあります。外部の人とやってもらった時のほうが一緒に考えられるし、外部の人は、職員も家族も囚われがちなことに関係なくフラットに投げかけてくれるので、私たちの苦しさ、囚われを解き放ってくれます。そして、当たり前を意識化してとらえ直す機会となってくれるのです。

松本知子

アーティストという存在と現場

川口 淳一

● 共にいるアーティスト

忘れられない場面がある。

とある特別養護老人ホームで、私は数名の利用者さんと輪になって歌を歌っていた。その場には演劇百貨店の柏木陽さんと打楽器奏者の片岡祐介さんも同席していた。私は輪の中にいる利用者さんの「反応」を引き出そうと、三線をかき鳴らし、強いオファーで語りかけ、少々オーバーなリアクションを繰り返していた。私の行動は医療職として、利用者さんの行動を変容させようという目論見が見え隠れしていたと思う。医療職とはそういう生業である。客観的に対象者の変化を促すことが是であり、なにも変わらなければその仕事はアウトカムとして価値を得ない。

ところが柏木さんは、輪の中でビデオカメラを気の向くままに回していただけだった。一緒に歌うわけでもなければ話すこともない。輪の中に起こる小さな煌め

きに誘われるようにカメラを向ける。それは利用者さんの目と同じ動きをしながら、ただそこに「いた」のである。

一方の片岡さんは、輪の外にいる両手足が不自由そうな車いすの男性のそばでカリンバ（箱に並んだ金属棒を弾いて鳴らすアフリカの楽器）を爪弾いていた。片岡さんのカリンバは、その男性の呼吸に呼応していた。輪の中で起こる力動に変化する男性の呼吸をカリンバで増幅させていた。片岡さんもまた男性とともにそこに「いた」のであった。

● いることを支える

医療の中では相手に「Doing（すること）」を求める。自分のために薬を飲み、リハビリをし、食事を摂ることを求める。しかしそれだけで医療はその人の生活を支援できているのだろうか疑問に感じることもある。「Being（いること）」の大切さ、ただそこにいることの

支援を医療は提供できてきたのだろうか。

砂原は「リハビリテーションという場合、わたしたちは華やかな成功例だけを数え上げることは許されないように思われる。リハビリテーションのスペクトラムを考えると、その一方の極に『納税者』を置けば、他方の極に植物状態のつづける人を置かないわけにはいかない。そして『納税者』『社会復帰』などというスローガンの強調は、そのスペクトラムの一端だけを取り上げて他の端を切りすてることにつながりかねない」としている*。なにかをしたくても身体が動かせない人はいる。しかし身体が動かないことと、役割を持ってないことはイコールではない。

医療の対象者には「いること」を支えていきたい人たちがいる。それは家庭や友人関係といった場で必要とされる存在であることを支えることだと思う。しかしそういった恒久的な場だけではなく、この瞬間、この場の中で価値ある存在として際立つことも必要である。

その一瞬はきっと自己効力感を高め、微笑みが生まれ、その人の周りに輪ができてくるだろう。そしてその一瞬の煌めきをしっかりと受け止め、愉しみ（あるいは面白がり）、明確な表現をもってリアクションすることに長けた人たちがいる。それが「アーティスト」だ。

● 表現すること

表現はひとりでは成り立たない。例えば手を振るというのは単なる「動作」に過ぎない。しかしその動きの意味を受け取ってくれる人がいて、手を振り返してくれる姿を見た時、その動作は「表現」としての意味を持つ。私は医療職が見過ごしてしまう小さな表現を、アーティストが関心を持って受け止める場面に幾度も遭遇した。その小さな表現が歌になり、ダンスになり、詩になるというリアクションは、その当事者を表現者へと変貌させてくれる。そしてそれは、その時空間にいること

を支援することにつながっている。ここにいてもいいのだと思わせてくれる。自分という存在に輪郭を描けることは、必要とされていることを実感できることに他ならない。

これは単純に「アート」を介在させればよいわけではない。それだと「さあ歌いましょう」といった始まりとなり、個々の表現は輪郭を持つことなく終わるだろう。優れたアーティストは自分からは動かないし、働きかけることもない。誰かの声、呼吸、窓の外から聴こえるヘリコプターの音が始まりの合図だ。そんなアーティストの存在を必要としている人たちがたくさんいる。

誰もが表現者であってほしい。そこにいるだけでも表現者であってほしい。

そして私たち医療に携わる人たちが手を差し伸べたくてもできなかったひとつの答えが、アーティストとの協業にはあると思う。

*注：砂原茂「リハビリテーション」（岩波新書／1980）



川口 淳一 かわぐち・じゅんいち

作業療法士。長崎大学医療技術短期大学部作業療学科卒。その後長崎市内の病院に勤務後、介護老人保健施設ふらの（北海道）へ赴任。副施設長として勤務し、施設利用者が演劇の裏方作業を行う役割活動を実施。2008年より結城病院（茨城県）へ赴任し、急性期から地域リハビリテーションまでの作業療法に従事。現在同院作業療法科科长。学生時代より演劇を用いた学習障がい児との演劇活動、ワークショップを実施。著書『リハビリテーションの不思議：聴こえてくる高齢者のこえ』（青海社／2006）。

根洗学園がやってきたこと

子どもたちの通える場所として、
親たちの声から生まれた

昭和49年

長い歴史の中で就学免除・就学猶予等の判断の元、学校に通えない子どもたちがいました。父や母・地域の声が行政と共に設立に動き、定員30名の根洗学園が生まれました。豊岡小学校の分校として1学級からのスタートとなりました。その後、園舎も増築、運動場の拡張も行われ幼児部・中学部・高等部も設置され定員80名の学園となりました。

養護学校が生まれた。根洗学園の危機

昭和54年

養護学校義務化に伴い人数の減少。3学級あった小学部が1学級になり、中学校は2学級の継続となりました。これまでいた場所からの転校。子どもたちは転校が残るかを選択し、最後の子どもが義務教育を終えるまで施設内学級（分校）は継続されました。80人定員であったものの、暫定定員制となり（その時の利用人数により定員を算定する）、子どもの人数分だけの職員配置となり、体制の不安定さと厳しさが生まれました。

また、養護学校の設立は、一方で、学園を利用する子どもの減少を意味します。全国的にもこの時期、幼児を含む児童施設のまま存続するのか、義務教育終

了後の子どもたちと共に成人の施設への変更をするのかの決断を求められることとなったのです。学園は、早期発見・早期療育視点に立つことを決め、児童施設としての存続を進めることとなりました。施設内学級も児童の進級と共に閉鎖され、56年には小学部、58年には中学部、平成元年には高等部が閉鎖されました。

幼児だけの施設が生まれた。

つなげる支援・知ってもらう支援の始まり

平成元年

幼児だけの学園としてスタートしました。根洗学園は子どもの施設ではありましたが、小さな子どもが通う場所の認識は全くありませんでした。まだまだ、「小さい子の施設だなんて!」という声も多く暫定定員が35名にまで減少した時もありました。幼児の施設ということを知っていただくために、保健師さんへの挨拶、関係機関への訪問、土曜教室として親子で遊びながら体験して理解していただく事業や、幼稚園や保育園に通いながら通う「子じかグループ」「親子での通園」事業等、子どもの状況に合わせた支援・利用方法を考え、実践されてきたのです。

制度の改正と共に、子どもの

「発達の支援・家族の支援・地域の支援」としての拠点が生まれた

平成11年～

施設名称の変更「精神薄弱児から知的障害へ」そして平成24年からは「児童発達支援センター」として子どもを支援する場所としての役割が広く捉えられるようになりました。

診断されていることが条件ではなく、気になり感や困り感がある状況からスタートでき、子育てを応援する場所に代わってきています。当たり前に必要な時に活用できる場所としての役割を果たす、支援を提供し、共に育ち合う場所として現在、進んでいます。

学園が拠点となり進めている事業は、児童発達支援センターとして、子ども・家族の生活を丸ごと支援する「毎日通園」、幼稚園や保育園に通いながら利用する「併行通園」。子どもたちの幼稚園や保育園にデリバリーし、ひとりひとりの子どもの状況に合わせ幼稚園や保育園の先生と連携しながら支援を進める「保育所等訪問支援事業」。地域の幼稚園保育園からの要請により園の中で困っている子どもたちへの支援ヒントと一緒に考える「巡回訪問事業」など、地域をも巻き込み連携しながら進んでいくソーシャルワーク的な要素を含んだ事業へと試行錯誤しながら進んでいます。

<p>学園の概要</p>	
<p>施設種別</p>	<p>児童発達支援センター(児童福祉法第43条)</p>
<p>名称</p>	<p>浜松市根洗学園</p>
<p>設置主体</p>	<p>所在地／浜松市根洗町667の1 経営主体／社会福祉法人ひかりの園</p>
<p>沿革</p>	<p>昭和49年 4月 1日……………開園 定員30名</p> <p>昭和50年 4月 1日……………施設内学級小学部1学級設置 (浜松市立豊岡小学校)</p> <p>昭和51年 3月31日……………園舎増設工事完了(50/11～)</p> <p>昭和51年 4月 1日……………定員80名に増員 幼児部設置 小学部2学級となる</p> <p>昭和52年 4月 1日……………施設内学級中学部1学級設置 (浜松市立北星中学校) 高等部設置</p> <p>昭和52年12月26日……………運動場拡張工事完了(52/9～)</p> <p>昭和53年 4月 1日……………小学部3学級、中学部2学級となる</p> <p>昭和54年 4月 1日……………養護学校義務制実施 小学部1学級となる</p> <p>昭和55年 4月 1日……………中学部1学級となる 暫定々員適用実施</p> <p>昭和56年 3月31日……………小学部閉鎖</p> <p>昭和58年 3月31日……………中学部閉鎖</p> <p>平成 元年 3月31日……………高等部閉鎖</p> <p>平成 元年 4月 1日……………幼児部のみとなる</p> <p>平成 2年11月 1日……………親子通園事業「土曜教室」開設</p> <p>平成 4年 4月 1日……………「土曜教室」を平日に移行、「子りすグループ」と名付ける</p> <p>平成 4年10月 1日……………親子通園事業の浜松市内利用児に「浜松市心身障害児(者)施設機能利用事業」を適用</p> <p>平成 5年 1月31日……………園舎大規模修繕工事完了(4/8～)</p> <p>平成11年 4月 1日……………施設種別名を知的障害児通園施設に変更</p> <p>平成13年 4月 1日……………親子通園事業に「子じかグループ」(幼稚園、保育所在籍児対象)を増設</p> <p>平成15年10月 1日……………浜松市より公立保育園への巡回相談の依頼を受ける</p> <p>平成18年 4月 1日……………指定管理制度導入</p> <p>平成18年10月 1日……………自立支援法施行により、施設支援事業所となる。</p> <p>平成21年 4月 1日……………浜松市より発達支援広場を受諾(西区)</p> <p>平成22年 8月 1日……………浜松市より子育て支援拠点事業を受託</p>
<p>【北 区】</p>	<p>平成23年 3月31日……………新事務室の増設工事・プレイルーム改築工事完了(12/15～)</p> <p>平成23年 4月 1日……………暫定定員55名より定員80名に変更。</p>
<p>浜松市より併行通園サポート事業を受託【所轄:障害福祉課】</p>	
<p>浜松市より発達支援広場(施設型)を受託【所轄:子育て支援課】</p> <p>通園バス1台増設(合計3台となる。運転手1名の増員)</p> <p>定員増に伴い、選抜療育部門 「にじ(母子通園)」「らいおん(併行療育)」を開設。定員10名。</p> <p>子育て支援拠点事業は第2種事業となる。定款変更。</p> <p>和室及びプレールームの雨漏り修繕、園舎壁面の剥裂箇所の修繕、車庫の塗装修繕を実施。</p>	
<p>平成24年 4月 1日……………児童福祉制度の改正により第2種社会福祉事業となる。定款変更。</p> <p>知的障害児通園施設より児童発達支援センターへ名称変更。併行通園サポート事業は、障害児通園事業として、児童発達センターでの療育に吸収され、実施する。</p> <p>保所等訪問支援事業の実施。これまで実施してきた学齢児への療育は法人として放課後等デイサービスへ移行して実施。</p>	
<p>定 員</p>	<p>80名</p>
<p>敷 地</p>	<p>4,904㎡</p>
<p>建物、設備</p>	<p>園舎(鉄筋コンクリート平屋建)1,037㎡</p> <p>車庫(鉄筋カラー折板)130㎡</p> <p>プール84㎡</p> <p>事務所(軽量鉄骨造平屋建・プレハブ工法)79.5㎡</p>
<p>駐 車 場</p>	<p>市より借地1926.68㎡</p>



おわりに

障害があること、特に“施設”にはあまりいいイメージがありません。親自身が障害がある子どもたちを受け入れ、また社会に受け入れてもらうためには時間がかかっているのが現状です。根洗学園に来る子どもたちは、普通の社会で期待されるコミュニケーションの苦手な子どもたちです。だからこそ、コミュニケーションするとはどういうことかを、私たちにつきつけてくれる大切な存在でもあるのです。このことを、ゲストの方々と共に、私たち自身がゆっくりと見出しできたように思います。

本書のタイトル「みえないものはなに？」というのは、障害がある子どもと対するだけでなく、私たち大人の間でも、わかりあうということはとても困難なことであり、わかりあうということは、思いを推し量ったり、表現を繰り返していくことなのではないか、見えないものはなんだろうと考えていくことではないかということを表しています。

これまで見えなかったものを少しずつ見えるようにしてくれた、ゲストの方々には心から感謝しています。また、学園に来て、日常を過ごしてくれる子どもたち、そしてそのご家族のみなさんにも、感謝しています。これからも、この学園で働く職員みんなが、子どもたちの社会を広げ、自分たち自身の視野を広げていけるように、これからも新しいことに少しずつ挑戦していきたいと思っています。



みえないものはなに？

“気づき”に気づく練習帳
浜松市根洗学園のワークショッププログラム

著者：浜松市根洗学園
2018年3月23日発行
発行人：松本知子（浜松市根洗学園）
コーディネート：鈴木一郎太（株式会社大と小とレフ）
編集：紫牟田伸子（SJ）
デザイン：ウエダトモミ
印刷：（株）中部印刷

2017年度静岡県文化プログラム採択



《静岡県文化プログラム》
2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向け、オリンピック憲章で開催が定められた「文化プログラム」が、日本全国で展開されます。静岡県文化プログラム推進委員会は、文化・芸術振興や文化・芸術による地域・社会課題対応を目指して、様々な団体等との協働による取組を進めています。



